

早稲田大学 ダークマターの懇談会, 2019.7.6

## AXION理論 重力波とアクシオンの切っても切れない関係

早田次郎 神戸大学理学研究科

なんでアクシオン?

- 2006年頃からCMBアノーマリーとゲージ場の関係を研究
- 2009年にゲージ場でCMB温度揺らぎの統計的非等方性を説明して一段落
- 次は、アクシオンインフレーションで重力波生成!

-> 2012年にいくつかのグループに先を越された

• 戦略練り直し

-> LHCで超対称性がみつからなかった 2014年頃からアクシオンダークマターにシフト

• アクシオン研究を重力波の視点から

いろんなものをアクシオンと呼ぶことにする

PQ アクシオン Peccei-Quinn 1977 Weinberg 1978; Wilczek 1979

アクシオン質量 
$$m_a = 5.70 \mu \text{eV} \left( \frac{10^{12} \text{GeV}}{f_a} \right)$$
  $f_a$ : 崩壊定数

オリジナルなモデルは実験と矛盾するので ``隠れたアクシオン'' が必要

DFSZ アクシオン Dine, Fischler, Srednicki 1981; Zhitnitsky 1980 KSVZ アクシオン Kim 1979; Shifman, Vainshtein, Zakharov 1980

ストリングアクシオン

Arvanitaki et al., 2010

$$m_a \approx \frac{\mu^2}{f_a} e^{-\# \text{moduli}/2}$$
 質量は対数的に等間隔で分布

質量と崩壊定数が独立というのが QCD axion とは違う

アクシオンと重力波の双対性



アクシオン

アクシオン検出に有効な検出装置は 重力波検出に有効 重力波検出に有効な検出装置は アクシオン検出に有効



アクシオンと重力波の連関性



アクシオン・光子・重力波

ダークマターでなくても面白い

アクシオン・光子 転換





ドメインごとに磁場はランダムに配位されているとした場合

アクシオン探索装置:回転ブラックホール

Super-radiance instability

Penrose 過程がくりかえされて回転エネルギーが引き抜かれる もし高速回転しているブラックホールがみつかればアクシオンはない エネルギーを得たアクシオンの雲が崩壊して重力波をだす

$$\left(\frac{M}{M_{\odot}}\right) \approx \left(\frac{R_{s}}{3\mathrm{km}}\right) \approx \left(\frac{m}{10^{-10}\,\mathrm{eV}}\right)^{-1}$$



なので

$$1M_{\odot} \le M \le 10^{10} M_{\odot}$$

の間に高速で回転するブラックホールが見つかれば

## $10^{-20} eV \le m \le 10^{-10} eV$

の対応するアクシオンは存在しない

やっぱりダークマターが旬

大スケールではCDMと区別つかない

アクシオンはコヒーレントな振動をしている

 $a = a_0 \cos mt$ 





 $\rho_{DM} = \frac{1}{2}\dot{a}^2 + \frac{1}{2}m^2a^2 \approx \frac{1}{2}m^2a_0^2$ 

圧力は

$$p_{DM} = \frac{1}{2}\dot{a}^2 - \frac{1}{2}m^2a^2 \approx -\frac{1}{2}m^2a_0^2\cos(2mt)$$

宇宙年齢に比べると圧倒的に早く振動しているので平均するとゼロ  $\left(\frac{m}{10^{-23} \text{eV}}\right) \approx \left(\frac{f}{10^{-8} \text{Hz}}\right)$ 宇宙論的なスケールではダークマターとして振る舞う

$$H_0 \approx 10^{-33} \mathrm{eV}$$

すなわち、宇宙論的観測でアクシオンだというのは難しい

ダークマター背景でのアクシオン・光子転換

Masaki, Aoki, Soda 2019



パルサータイミングアレイ探索

## nHz重力波探索

Detweiler 1979

 $h_{ij} = \int d^2 \hat{\mathbf{n}} h_{ij} \left( t - \hat{\mathbf{n}} \cdot \mathbf{x} \right)$ 背景重力波  $\hat{\mathbf{n}}$ : direction of wave propagation  $\Delta t \equiv \int_{0}^{t} dt_{e} z(t_{e}, \hat{\mathbf{n}}) \qquad z \equiv \frac{V_{0} - V(t_{e})}{V_{0}} = \frac{1}{2} \int d^{2} \hat{\mathbf{n}} \frac{\hat{p}^{i} \hat{p}^{j}}{1 + \hat{\mathbf{n}} \cdot \hat{p}} \Delta h_{ij}(\hat{\mathbf{n}}) = \int d^{2} \hat{\mathbf{n}} z(t_{e}, \hat{\mathbf{n}})$ パルサー周期のズレ Current PTA -6 0.9K Blackbody Spectrum LISA Advanced LIGO -8 MBH–MBH Binaries Extended Inflation 1 4 Ν. -10  $\text{Log}_{10}(\Omega_g(f)h^2)$ 1st Order New Astron.Rev. 48 (2004) 993-1002, COBE 11 EW Phase SKA-PTA PoS MRU (2007) 020 Transition Global -12 strings 1/ -14 Slow-roll inflation - Upper Bound CMB-POL Inflation  $\alpha = 2$ -16 Inflation  $\alpha = 80$ -15 -10 -5 0 5 10

Log<sub>10</sub>(f/Hz)

13

アクシオン探索

Khmelnitsky & Rubakov 2014

銀河スケールでは宇宙膨張は無視できる

$$ds^{2} = -(1+2\Phi)dt^{2} + (1-2\Phi)\delta_{ij}dx^{i}dx^{j}$$

時間に依存する部分しか関係なくて  $\Phi = \frac{\rho_{DM}}{8m^2}\cos(2mt)$ 

 $\Delta t = -\int_0^t \frac{\Omega(t') - \Omega_0}{\Omega_0} dt' \qquad \frac{\Omega(t) - \Omega_0}{\Omega_0} = \Phi(\mathbf{x}, t) - \Phi(\mathbf{x}_p, t')$ パルサー周期のズレ



NANOGRav 11year data

Kato & Soda 2019



マグノン検出器 Ikeda et al. 2019

$$L_{\rm int} = -ig_{aee}a\overline{\psi}\gamma_5\psi \simeq -\frac{g_{aee}\hbar}{2m_e}\hat{\sigma}\cdot\nabla a = 2\mu_B\hat{S}\cdot\left(-\frac{g_{aee}}{e}\nabla a\right) \qquad \mu_B = \frac{e\hbar}{2m_e}$$



$$f_a = \frac{\omega_a}{2\pi} = \frac{m_a c^2}{h} = 0.24 \left(\frac{m_a}{1.0 \mu \text{eV}}\right) \text{GHz}$$





アクシオンダークマター中を 伝搬する電磁波と重力波

アクシオンダークマター中の電磁波伝播

Yoshida & Soda 2018

アクシオンがダークマターとして存在すると

円偏光基底で波動方程式は 
$$\ddot{A} + k^2 \left[ 1 + \varepsilon \lambda \frac{\sqrt{\rho}}{k} \sin mt \right] A = 0$$
,  $\varepsilon = \pm 1$ 

共鳴幅が狭い

パラメータ共鳴周波数は  $f_r = 1.2 \times 10^4 \left(\frac{m}{10^{-10} \text{ eV}}\right) \text{Hz}$   $\Delta f = 2.6 \times 10^{-14} \frac{\lambda}{\left(10^{16} \text{ GeV}\right)^{-1}} \sqrt{\frac{\rho}{0.3 \text{ GeV/cm}^3}} \text{ Hz}$ 

アクシオンダークマター密度への制限

ダークマター中を  
$$30 \frac{(10^{12} \text{GeV})^{-1}}{\lambda} \sqrt{\frac{0.3 \text{GeV/cm}^3}{\rho}} \text{ pc}$$

だけ伝播すると振幅が10倍になる 30Mpc 伝播するとして、このような成長が見られないとすると アクシオンの残存量

$$\frac{\rho_{axion}}{\rho_{DM}} \le 10^{-12}$$

アクシオンダークマター中の重力波伝播

$$S = \frac{M_p^2}{2} \int d^4x \sqrt{-g} R + \frac{M_p}{8} \ell^2 \int d^4x \sqrt{-g} a(x) \varepsilon^{\mu\nu\lambda\rho} R_{\alpha\beta\mu\nu} R^{\alpha\beta}{}_{\lambda\rho} - \int d^4x \sqrt{-g} \left[ \frac{1}{2} (\partial a)^2 + \frac{1}{2} m^2 a^2 \right]$$

 $\ell \leq 10^8 \, km$  Y.Ali-Haimoud & Y.Chen 2011

宇宙膨張は無視できて

$$a = a_0 \cos mt$$
  $h_{ij} = h_R e_{ij}^R(\mathbf{n}) + h_L e_{ij}^L(\mathbf{n})$ 

アクシオン背景での重力波の伝播は

$$\ddot{h}_{A} + \frac{m\varepsilon_{A}\delta\cos mt}{m + \varepsilon_{A}k\delta\cos mt}k\dot{h}_{A} + k^{2}h_{A} = 0 \qquad \varepsilon_{A} = \begin{cases} 1 & \text{for R} \\ -1 & \text{for L} \end{cases} \qquad \delta = m^{2}\ell^{2}\frac{a_{0}}{M_{p}}$$

共鳴が起きる

$$k_{\rm res} = \frac{m}{2} = 1.2 \times 10^4 \left(\frac{m}{10^{-10} \,{\rm eV}}\right) {\rm Hz}$$

20

## Chern-Simons 重力への制限

Yoshida & Soda 2018

アクシオンがダークマターの全てと仮定する

重力波は

$$10^{-8} \left(\frac{10^{-10} \text{eV}}{m}\right) \left(\frac{10^8 \text{km}}{\ell}\right)^2 \sqrt{\frac{0.3 \text{GeV/cm}^3}{\rho}} \text{ pc}$$

だけ伝播すると振幅が10倍になる。 10kpc 伝播するごとに、10kHzの重力波の振幅は  $10^{10^{12}}$  だけ増大する。

しかし、こんな現象は観測されていない

したがって、 100Mpc だけ伝搬してきたとすると、強い制限を得ることができる

 $\ell \leq 1 \mathrm{km}$ 

アクシオンダークマター探索

Yoshida & Soda 2018

重力波の観測で、結合定数が  $\ell = 100 \text{km}$  と決まったと仮定する

アクシオン背景を重力波が

$$1.0 \times \left(\frac{10^{-10} \text{ eV}}{m}\right) \left(\frac{100 \text{ km}}{\ell}\right)^2 \sqrt{\frac{10^{-29} \text{ g/cm}^3}{\rho}} \text{ Mpc}$$

だけ伝播すると振幅が10倍になる。 アクシオンダークマターは重力波を観測することで  $\Omega_a = 0.01$  まで観測できる

同時に、重力セクターでのparityの破れも観測できる

•

まとめ

- アクシオンと重力波の双対性は作業仮説として有効
- アクシオンは重力波と関係が深い
- アクシオンがダークマターなら素晴らしいが、
  ダークマターでなくても面白い
- ダークマターならコヒーレントな振動を観測しなくては
- テーブルトップの実験でもっと面白いことがきっとある